

---

# 真田『おばけ』相談所

ふぐるま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真田『おばけ』相談所

### 【Nコード】

N2858J

### 【作者名】

ふぐるま

### 【あらすじ】

日本のどこかにある一風変わった相談所。そこに来る一風変わった相談客。今回はあの有名な都市伝説です。

「おや神崎君、今日の紅茶はアールグレイかね」  
書類の散乱した事務用デスクに指を組み肘を突いた姿勢で男が尋ねる。

顔色は悪く髪型は七三分け。縁なし眼鏡の奥にきらりと光る穏やかな目。

ぱつと見はいたって普通のサラリーマン。だがその実体は『真田なんでも相談所』という得体の知れない事務所の所長だ。

「いいえ真田さん。番茶ですよ」

湯飲みを書類の上に置き微笑む美女。彼女はこの相談所の給仕兼秘書だ。

彼女の手腕と機転とポニーテールがなければ今頃所長は餓死していただろう。

「ふむ」

番茶を一息に飲み干して所長は呟く。

「めんつゆじゃないか」

目の前では神崎秘書が春の到来を告げる妖精の様な笑顔を浮かべている。

「今日の予定はどうなっている？」

口内に若干の違和感を残しつつ真田所長が問う。

「10時に依頼人の方が訪れます。二ヶ月ぶりの仕事です」

「依頼内容は」

「知りません」

「……なるほど。それならばお茶の用意を。僕がさつき飲んだヤツじゃあないお茶を用意するんだ」

「かしこまりました」

軽く頭を下げて神崎秘書は給湯室へ戻って行った。

机の上の書類を重ねて引き出しに詰め込み、もう一度指を組み肘を

突く。この体勢で依頼人を待つのだ。

しばらくして

コンコン。

相談所の木製ドアが叩かれる。

「どつぞ」

所長と秘書が同時に答える。

コンコン。

またドアが叩かれる。

所長が不安げに秘書を見上げる。

神崎秘書は穏やかな笑みを湛えたまま頷きドアを開ける。

ぎいいと音を立ててドアが開く。

ドアの向こうには老婆が居た。

白髪は床に着かんばかりに伸び放題。干からびたような茶色の顔に

赤い眼。そして両手に持つ巨大な鎌からは禍々しいオーラが。

「なるほど。神崎君。二ヶ月前の客は誰だったかな」

「てけてけでしたね」

間髪入れずに神崎秘書が答える。

「これで人外の客は何体目かな」

「八体と半分ですネ」

「その半分というのは……」

「てけてけです」

これが神崎秘書の『機転』だ。

開業してから半年。一人として客の来ない相談所。

このままでは飢え死にしまっ。自分の身と、餓死寸前の所長を不安に思いながら神崎秘書は趣味のオカルトサイト巡りをしていた。そこで見つけたこの文字。

『この話を聞いた貴方の元へ三日以内に霊が訪れます』

「これだ！」

神崎秘書は喜び勇んでその怪談を熟読した。

そして三日後に来た霊。

初めは怯えていた所長も空腹には勝てず霊の相談を聞き、相談料として果物の詰め合わせ（お供え物）を貰ったのだった。

「神崎君。この妖怪、執拗に僕の足を狙ってくるんだ。……この大きな鎌で！」

机の上でジャンプを繰り返して老婆の鎌を回避する真田所長。

「そういう妖怪です。今回の依頼人はババサレさんです。聞いた人の所に来て扉をノックします。ノックに答えて扉を開けてしまうと足を刈り取られるそうです。ババサレと三回唱えると消え去るそうです」

メモを見ながら流暢に説明する神崎秘書。

「な……るっほどう。はあっ。はあ、もう無理だっ！もう言う！ババサレ、ババサレ、ババサレ」

「お茶請けにどうぞ」

退散の呪文を唱えかけた社長の口に饅頭が滑り込む。

そしてここで交わされるアイコンタクト。

（所長！この客を逃せばまた醤油をかけた古新聞を食べる生活に戻りますよ！）

（それは嫌だ！そういえば君はあの時も焼き魚を食べていたね。何

故だ！)

「眼を逸らすな神崎君！」

空中で体をひねり一回転。カンフー映画さながらの回し蹴り。鞭のようにしなつた足先は老婆の持つ大振りの鎌を相談所の扉まで弾き飛ばす。

「はあはあ。ぜはあ、ひゅう、ごほっげほげほ。相談を……どうぞ

ぎい。ばたん。

事務所のドアが閉まる。

「さすが真田所長です。自分では扉を開けられないという彼女の悩みを『両手に持っている鎌を一旦床に置く』という方法で解決してしまつなんて」

神崎秘書がきらきらとした笑顔を浮かべて机の上に湯飲みを置く。

「まあ、何てこと無い相談だったよ」

僕は今回凶悪な妖怪の危険度をさらに増しただけな気がする。

言葉を湯飲みの中のコーンポタージュと一緒に飲み込む。

あの妖怪が置いて帰った大量のゲソ。

しばらく飢え死にはしないが辛い生活になりそうだ。

(後書き)

ぜひとも感想よろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2858j/>

---

真田『おばけ』相談所

2011年1月19日05時05分発行